医事万華鏡

56. 働き蜂の分業システム

仕事納めの年末は、年末年始の休暇に向けて片付けておかなければならない仕事量が増え、何かと慌ただしくなりがちです。加えて、年末の挨拶回りや忘年会ラッシュ等も相まって、忙しさに拍車がかかります。一方で、未完了の山積みにされた課題によって、〝急かされた心理状態〟が生まれ、それが人に〝忙しい〟と感じさせる要因なのかもしれません。

さて、この労働という観点について少し掘り下げるため、働き蜂について言及してみたいと思います。

蜂の社会も人間社会と同じ構造を有し、同一の遺伝情報を持ちつつ異なる形質発現をする女王蜂を頂点とした「階級分化」と、働き蜂にみられる「分業」体制が敷かれているのだそうです。働き蜂と聞くと、花粉や蜜集めを想起しますが、仕事はそれに留まらず、いわゆる巣部屋の掃除や育児、女王蜂の世話に餌の貯蔵、巣の増改築、門番等多岐にわたり、これらの仕事を働き蜂たちは分業でこなしているそうです。

興味深いのは、働き蜂たちは一生を通じて同じ仕事をするわけではなく、日齢を重ねるに従い職種を変えていく点です。季節や寿命の違いで転職の時期は変わるものの、数多くの仕事をほぼ決まった順で変えていくのだそうです。

さて、人材不足と言われて久しい昨今。あらゆる組織は、欠員を埋めるために新たな人員の採用に躍起になりがちです。しかし採用することに固執せず、今いる人員を流動的に生かし、別の職種にあてがう人員配置こそが求められているのではないでしょうか。もちろん人には向き不向きがあり、専門性が問われる仕事では難しいかもしれませんが、多くの仕事はやる気さえあればクリアできるものです。〝できないのではなくやらないだけ〟ということもままあります。しかも新しいことへのチャレンジは認知症予防や若さ、生きがいに繋がるとも言われています。

医師の世界でも本年4月より「働き方改革」が施行されました。当初、医療環境はそれ以外の労働環境とは特殊であるため、働き方改革には大きな壁があり、人件費と医師の労働力の整合性が大きな課題とされていました。しかし今となっては、多くの医療機関は医師の働き方を推し進め、労働環境は徐々に改善されているそうです。

労働人口に比して高齢者人口の増大、持続可能性に懸念高まる社会保障等、いま日本社会は未曽有な危機に晒されています。しかし労働人口が足りない時代こそ、働き蜂のような分業体制と、ＡＩやＩＴ化を駆使しつつ乗り切ることが求められているのではないでしょうか。（ＪＭＳ主幹・野村元久）